

「火宅無常の世界で」

黒田 真教

島国の日本ですが、最近隣国との領土問題が話題になっています。私などは、行ったこともないですし、ほとんど知りもしなかったいくつかの島なのに、隣国から一方的に「この島は、我が国の領土である」と突き付けられると、憤りを感じます。私とは直接、関係のないことなのに、なぜ損をした気持ちになってしまうのだろうか、恥ずかしく思います。

しかし、一部の方にこの話をすると「日本国民なのだから、そう考えるのは当然だし、むしろこの領土問題に対して、一致団結してあたるべきではないか。それが愛国心というものだ」と言われました。この領土問題の相手国が、「愛国無罪」という言葉を使っていたのが思い出されます。「愛国無罪」というのは、「愛国心によって行ったことは、悪いことでも罪にならない」という考え方だそうです。

『歎異抄』には、「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」で始まる悪人正機が述べてありますが、このお言葉は悪いことをしても罪が消えてなくなるということではありません。悪いことをしても、罪にならないという考え方では、私たちはいつまでたっても仏法のご縁をいただけないのではないのでしょうか。

人間は人の間と書きますが、私たちは、人と人の間に線を引きたがるようです。「あの人と私」という考え方は、私という人間と他者を区別する考え方なのです。それが大きくなると国と国との間の線、国境ということになります。この線は引く人の煩惱によって、自分の都合のいいように線引きしてしまうものだと思います。

また、『歎異抄』に、「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもって、そらごとたわごと、まことあることなき」とあります。

私たちは凡夫ですし、この世は火宅無常の世界で、まことと言えるものはないのに、自分の都合で一生懸命線を引いては自分を肯定し、他者を否定せずにはおれない、本当におぼつかないことを頼りに生きようとしていることを、考えさせられたことです。